障がい児をもつ母親の感情体験に関する研究

The Emotional Experience of Mothers of Children with Disabilities

奇　　恵　英
Hyeyoung Ki

問題と目的

従来、障がい児の親に関する研究は大きく二つの流れに大別される。一つは、親を障がい児の発達援助においてもっとも身近な援助者として位置づけ、その役割の重要性を強調したものである。その場合、障害児を持つことによる心理的負担やストレスの大きさ（新見ら、1981；1985)、健常児の親と比較することによる障害児をもつ親の養育態度の不適切さ（中塚、1988）を指摘することによって、親がよき発達援助者であるためにはそれらの問題を解決することが必要であり、そのための専門的援助が必要であることを示唆している。しかし、このような視点がその本来の意図とは違い、障がい児をもつ親の問題点や否定的な面だけが強調される結果をもたらしたことは否めない。

もう一つの流れは、子どもの「障害」の診断初期の親の心理的葛藤とその変化過程に関するものであり、多くは障がい児をもつことによる心理的苦悩を乗り越え、育児の意義を見出し、親自身の成長を実感する過程を子ども受容過程として捉えてきた。この場合、子どもの診断初期の親の心理的ショックの大きさが取り上げられ、そのショックを乗り越え、現実に対応していくためにどのような心理的変化を体験するのかが注目された。

その際、診断初期に体験する気持ちに関しては、「絶望・否認・罪の意識・混乱・怒り」などを中心に共通しているが、その変化に関しては視点が異なってくる。鑪（1963）は「苦悩」と「克服」に親の類型を大きく分け、親が子どもを受容する過程は社会への訴えや啓蒙に力を注ぐようになるような親自身の生き方や世界の変化を意味することを示唆している。Drotar ら（1975）は「ショック→否定→悲しみと怒り→適応→再構成」といったように、初期の感情が現実的な養育へ取り組むまでどのような感情が、どのような順序で持続され、克服されていくのかに注目した。

このように障がい児をもつことによって体験する親の苦悩は克服していくものとして捉えられ、そのような克服と昇華を通して親は育児の意義を見出し、前向きな姿勢で養育に取り組むと考えられ、したがって、養育において、親の成長においてこのような克服あるいは昇華が必要なものとして考えられてきた。言いかえれば、心理的苦悩の克服が障害児の親が進むべき指標となり、苦悩あるいは葛藤を抱くことは望ましくないものとして捉えられるような印象をもたらしたことは否めない。

このように従来の視点を振り返ると、障がい児をもつ親はその心理的葛藤や苦悩の大きさが予想されるがゆえに、その大変さや否定的な面が強調されるが、逆にそれを乗り越え、「障害児の親として」肯定的な指標を目指すという新たな課題が課せられてきたともいえる。しかし、障がいは一生つきあっていくものであり、子どもの成長は予測しかねる状況において親がもつ心理的葛藤は一時期を過ぎれば克服できるものであろうか。一方、従来の克服や昇華の視点からみられるように、障がい児を養育する中でその意義を見出し、子どもと共に生きる意欲を抱く親の成長あるいは変化は、心理的葛藤や苦悩を乗り換えた結果の所産であるのであろうか。

これらの疑問について、Emde & Brown（1978）は診断告知によって「第一の悲しみ」が体験されるが、その後子どもの変化の微弱さから「次なる悲しみの波」が訪れることを示唆した。すなわち、子どもの成長や変化とともにそのつど親の情緒的体験が変化しうるこ

とを意味する。このことから、田中・丹羽（1990）はダウン症児の母親への長期にわたる面接を通して、診断初期と幼児期の発達の遅れが目立つ時期を境に「立ち直り」と「感情体験」を繰り返し経験しながら、学童期に入ることで「仮の安定期」に至ることを明らかにした。なお、その間「立ち直り」と「感情体験」（ここで意味する「感情体験」は、診断告知による否定的感情体験や子どもの成長の遅れから再体験される否定的感情を指す）を繰り返しながらも、「立ち直る」ことによって「健常児では味わえない幸せ」、「多くのことを教えてもらった」、「子どもがかわいい」といったような母親自身の成長や心理的変化があることを示唆している。田中・丹羽（同上）はこのように“母親が「自分自身と子どもを受容し立ち直る過程」には・・・まさに段階があり、循環的な体験を繰り返しながら統合を目指し、新しい中心へと到達していくという意味でInitationであり、Jungのいう個性化過程である”と考察した。このような考察は、障がい児の育児を通して親が体験する否定的感情を、癒され、克服されるべきものとしてのみ捉えず、そのような感情体験が母親の自己受容や自己実現とも言うべき自己成長につながることを示唆したところで高く評価されるべきであろう。

しかし、否定的感情体験から「立ち直る」ことによって育児の肯定的意味を見つけ、“障害に対してあきらめ、障害を受容する”ことにより、母親の心理的状態が安定し、自分の成長を感じるようになるという過程には、否定的感情を克服することによって肯定的感情が現れるという見方は依然として残されている。これは田中・丹羽が、母親の感情体験の過程は単なるGrief Workとして捉えられるべきではなく、母親自身の成長過程として捉えることが可能であることを自ら示唆していながらも、障がい児をもつ親の感情体験を否定的なものとして捉える立場は、従来の基本的図式からは脱却していないと思われる。

実際の心理臨床実践の場において筆者が出会う、多くの障がい児をもつ母親は確かに子どもの障がいによる心理的葛藤や苦悩を抱えているが、日々の生活の中ではその都度の喜びや楽しみを体験しながら、それらを支えに活力を得、一歩一歩進んでいる様子を面接場面で語っている。

よって、本研究では、障がい児をもつ母親が育児過程において体験する気持ちのあり様を捉えなおし、その内容を明らかにするとともに、関連要因から分析することによって、障がい児をもつ母親の心理を多面的に理解することを目的とする。

＜予備調査：項目の収集と作成＞

15歳（義務教育修了）以上の障がい児をもつ母親12名に対してインタビューによる調査を行った。調査期間は1995年９月～12月であり、面接は各対象者に個別に行なわれた（平均面接時間65分）。面接内容は録音し、後に逐語録を作成、基礎データーとし、分析を行った。調査内容は、ほぼ育児を終えた対象者に、乳幼児期、学齢期（義務教育期間）、学齢期以降を節目として、各時期に体験した育児における「肯定的感情」と「否定的感情」、およびその都度の「子どもとの関わり方」について振り返るものに設定した。

このインタビュー調査を通して、育児における印象深い出来事を中心に、時系列的に話してもらい、その中で育児によって吟味された感情体験に関する35項目、「子どもとの関わり方」に関する24項目を抽出した。これらの項目を資料として、心理学専攻の大学院生３名及び教員１名によってKJ法で整理し、項目の選定と修正を行った。その結果、「育児における感情体験」32項目、「子どもへの関わり方」20項目が得られ、採用した。

＜本調査＞

方　法

１．対象者：障がい児をもつ母親

２．調査期間：1998年６月～12月

３．調査方法：質問紙調査。筆者が関わる療育機関及び学校、施設等に質問紙を配布し、後日回収した。配布部数は200部、回収部数は185部（回収率92.5％）、欠落回答のあるもの７部を除いた178人の回答部数を分析対象とした。178人の年齢分布は27歳から68歳、平均年齢は41.1歳。

４．調査内容

１）フェースシート：家族構成、母親の年齢、子どもの年齢、診断名、所属、障害の程度（表出言語能力、言語理解能力、移動・運動能力、介助度）の項目で構成。障がいの程度に関しては、各下位

項目を４つの段階に分けて、その程度を示すようにした（１＝軽度群、２＝中度群、３＝重度群、４＝重度重複群；【Table1】参照）。

2）「育児における感情体験」尺度：予備調査で得られた32項目。

3）「子どもへの関わり方」尺度：予備調査で得られた20項目。

結　果

1．「育児における感情体験」尺度の因子分析

「育児における感情体験」を尋ねる32項目について主因子法により因子を抽出し、スクリープロット（各固有値＝7.147、6.044；共通性推定値合計＝12.151、32項目の全分散に占める割合＝41.223％）から因子数を２とし、Varimax 回転を行った。因子負荷量が２因子いずれも絶対値0.4以下を示し、かつ共通性の低い３項目を除外し、かつ他因子にも高いまたは中程度の負荷を示した４項目を除外した。その結果、第１因子は、「子どもに対する私の気持ちはだれも分かってくれない」、「子どもが他の子どもに比べて可哀想という気持ちがある」などの項目が高い負荷量を示したことから、この因子を「否定的感情」（13項目）と命名した。第２因子は、「子どものおかげで自分は幸せであると感じる」、「子どものおかげで生活の楽しさを感じる」、「子どもは私にいい影響を与えてくれているように感じる」などの項目が高い負荷量を示したことから、「肯定的感情」（12項目）と命名した（表１参照）。

2．「子どもとの関わり方」尺度の因子分析

「子どもとの関わり方」を尋ねる20項目について、主因子法を行った。共通性の反復推定を行い、固有値の推移と累積寄与率（各固有値＝2.815、2.646；共通性推定値合計＝5.461、20項目の全分散に占める割合＝27.31％）をもとに因子数を２とし、Varimax 回転を行い、因子負荷量が２因子いずれも絶対値0.4以下を示し、かつ共通性の低い10項目を除外した。その結果、第１因子は、「子どものことで落ち込むことがあってもすぐ気持ちを切り替える」、「私は子どもが親から離れている時、自分の時間を楽しんでいる」、「私は子どもが親の期待とおりいかなくても仕方ないと思う」など、ある程度子どもから適度な距離をもって接している内容から、この因子を「ほどよい関わり方」と命名した。第２因子は、「私は子どもから離れていると落ち着かない」、「私は子どもを人に任せるのは心配であまり人の手を借りない」など、子どもとの距離が取れず、自己没入している様子から、この因子を「強迫的関わり方」と命名した（表２参照）。

3．「育児における感情体験」と「子どもへの関わり方」の相関

「育児における感情体験」の二つのカテゴリと「子どもとの関わり方」の二つのカテゴリをあわせて、４つの指標の相関を求めたところ、「ほどよい関わり方」は「肯定的感情」とは相関が見られず、「否定的感情」と負の相関が見られ、「強迫的関わり方」は「肯定的感情」と「否定的感情」の両方に正の相関が見られた（表３参照）。この結果から、「強迫的関わり方」の場合、情緒的にアンビバレントな様子がうかがえた。

4．「育児における感情体験」の下位カテゴリの比較

「育児における感情体験」尺度の下位カテゴリである「肯定的感情」と「否定的感情」の全体対象者の得点平均をｔ検定により比較した結果、有意差がみられ（$t=13.643$、$p<.001$）、「肯定的感情」が「否定的感情」より有意に高かった。(Figure1参照)

5．「子どもへの関わり方」の下位カテゴリの比較

「子どもへの関わり方」尺度の下位カテゴリである

【Table1．障害程度（＊該当するところに○をつけてください）】

表出言語	理解力	生活介助	食事	お風呂	トイレ	移動	＊評定
会話が可能	十分理解	不要					1
２～３語文可	ある程度理解	一部のみ介助					2
単語	簡単な指示理解	ある程度介助					3
発語はない	あまりできない	全介助					4

表1　「育児における感情体験」尺度　バリマックス回転後の因子負荷量

	項目	F1	F2	共通性
	第1因子：否定的感情			
Q21	子どもに対する私の気持ちはだれも分かってくれない	.755	-.057	.573
Q5	子どもがほかの子どもと比べて可哀想という気持ちがある	.691	-.066	.482
Q18	子どものことで自分を責める気持ちがある	.690	.139	.496
Q16	子どもの状態がこのままではいけないという焦りがある	.676	.083	.464
Q17	子どもの状態を早く改善しなければという焦りがある	.674	.101	.465
Q20	子どものことで私に罰が当たった感じがある	.663	.115	.453
Q22	母親として私は人より劣っていると感じる	.644	-.024	.415
Q19	子どもに対して申し訳ないという気持ちがある	.637	.141	.425
Q4	子どもが社会的に差別されているという怒りがある	.579	.059	.338
Q10	子どもの成長の見通しがつかない不安がある	.571	-.182	.360
Q11	子どもの将来の見通しがつかない不安がある	.569	-.235	.379
Q3	子どもが身近な周りの人に理解されないという怒りがある	.566	.169	.349
Q6	子どもが自分の生涯を自覚するのは可哀想という気持ちがある	.558	.138	.330
	第2因子：肯定的感情			
Q27	子どものおかげで自分は幸せであると感じる	-.079	.802	.650
Q26	子どものおかげで生活の楽しさを感じる	-.099	.763	.592
Q23	子どもは私にいい影響を与えてくれているように感じる	-.048	.742	.553
Q15	子どもは私の生活の意欲である	.198	.729	.571
Q14	子どもは私の生きがいである	.209	.670	.492
Q2	障害のない子どもの親に味わえない喜びがある	-.063	.660	.440
Q13	子どもが愛しいと感じる	.078	.659	.440
Q12	子どもが可愛いと感じる	.019	.607	.369
Q25	子どものおかげで自分が成長したと感じる	.093	.601	.370
Q32	子どものおかげで自分に自信が持てるように感じる	-.102	.538	.300
Q1	子どもの変化が見える喜びがある	-.029	.472	.224
Q7	子どもがよくなるという期待がある	.108	.446	.211
	因子寄与率	20.94	20.283	13.191
	累積寄与率	20.94	41.223	

表2　「子どもとの関わり方」尺度　バリマックス回転後の因子負荷量

	項目	F1	F2	共通性
	第1因子：ほどよい関わり方			
Q18	私は子どものことで落ち込むことがあってもすぐ気持ちを切り替える	.719	.060	.521
Q19	私は子どもが親から離れている時、自分の時間を楽しんでいる	.655	-.060	.433
Q10	私は子どもが親の期待通りいかなくても仕方ないと思う	.655	.002	.428
Q20	私は子どもの気持ちと親の気持ちが食い違うことがあって当たり前だと思う	.645	.102	.426
Q17	私は子どもの将来はなるようになると思う	.610	-.074	.378
	第2因子：強迫的関わり方			
Q16	私は子どもに絶対必要な人だと思う	.264	.626	.383
Q2	私は子どもが自分でできることも手を貸してしまう	-.013	.567	.314
Q3	私は子どもを人に任せるのは心配であまり人の手を借りない	.066	.556	.585
Q1	私は今がむしゃらに頑張っている	-.182	.543	.328
Q11	私は子どもの状態がよくなるのであれば何でも試している	.131	.478	.246
	因子寄与率	25.116	22.239	4.261
	累積寄与率	25.116	47.355	

表３　「育児における感情体験」と「子どもとの関わり方」の相関

	肯定的	否定的	強迫的	ほどよい
肯定的	1	-0.1	.291（＊＊）	0.026
否定的	-0.1	1	.295（＊＊）	-.321（＊＊）
強迫的	.291（＊＊）	.295（＊＊）	1	0.027
ほどよい	0.026	-.321（＊＊）	0.027	1

＊＊p＜.001

「ほどよい関わり」と「強迫的関わり」の全体対象者の得点平均をｔ検定により比較した結果、有意差がみられ（ｔ＝8.570、ｐ＜.001)、「ほどよい関わり」が「強迫的関わり」より有意に高かった。(Figure2参照)

６.「育児における感情体験」の分析

１）子どもの年齢との関連

対象となる子どもの年齢は0.9歳から38歳に至るまで幅広いが、障がいをもつ子どもの育児において大きな節目となるのは、就学前、小学校期、中学校期、義務教育終了後と大別できることから、就学までの子ども群（第１群、44名)、小学校期の子ども群（第２群、65名)、中学校期の子ども群（第３群、37名)、義務教育終了後の子ども群（第４群、32名）の４群に設定した。子ども年齢群を独立変数に、育児のおける感情体験（「肯定的感情」、「否定的感情」）のそれぞれの得点平均を従属変数に１要因分散分析を行った結果、「否定的感情」において群間の有意差がみられた（F(3,177)＝3.043、ｐ＜.05)。多重比較による下位検定を行った結果、第１群が第３群より有意に高かった（ｐ＜.05)。(Figure3参照)

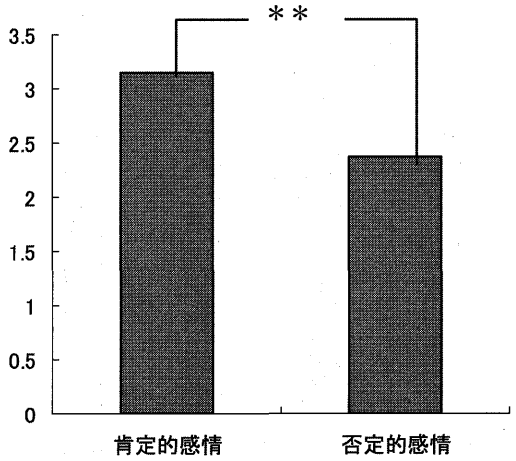

Figure1　「育児における感情体験」の下位尺度の比較

２）母親の年齢との関連

対象となる母親の年齢は平均41.1歳で、27歳の１名を除くと、31歳から68歳まで幅広いことから、子どもの年齢の分布を考慮し、４群に設定した。その内訳は、第１群が35歳以下（38名)、第２群が40歳以下（63名)、第３群が45歳以下（34名)、第４群が46歳以上（43名）である。母親年齢群を独立変数に、育児のおける感情

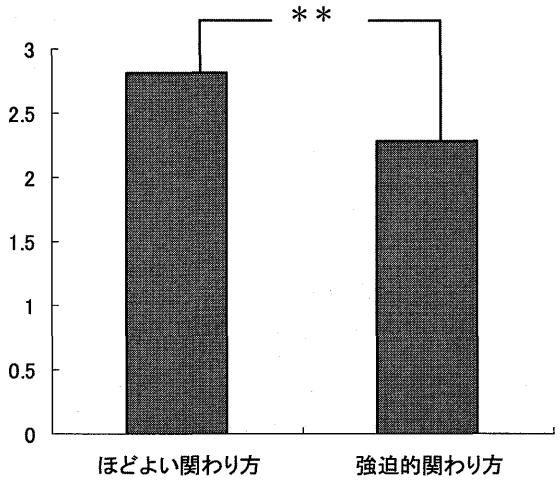

Figure2　「子どもとの関わり方」の下位尺度の比較

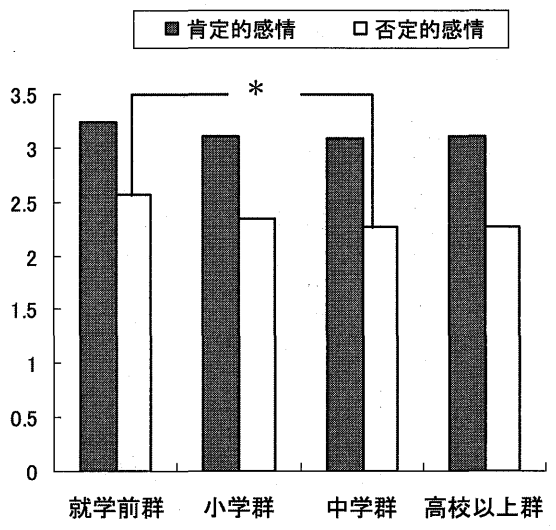

Figure3　子どもの年齢と育児における感情体験

体験（「肯定的感情」、「否定的感情」）のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「肯定的感情」（F(3,177)＝2.316、p＜.1)、「否定的感情」（F(3,177)＝2.477、p＜.1）のそれぞれにおいて群間の有意な傾向がみられた。このことから、母親の年齢が低いほど、肯定的感情も否定的感情も高いことがありうることが予測された。(Figure4参照)

3）「障害」の種類との関連

「障害」の種類については、脳性マヒ群（57名)、ダウン症を含む知的障害群（30名)、自閉症群（28名)、染色体異常や事故等の後遺症を含む重複障害群（63名）に分けられた。障害の種類の4群を独立変数に、「育児のおける感情体験」(「肯定的感情」、「否定的感情」）のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「肯定的感情」において群間に有意差がみられ（F(3,177)＝3.197、p＜.05)、さらに「否定的な感情」において有意な傾向がみられた（F(3,177)＝2.141、p＜.1)。多重比較による下位検定を行った結果、知的障害群が脳性マヒ群より有意に高かった（p＜.05)。(Figure5参照)

4）障がいの程度との関連

障がいの程度（表出言語能力、言語理解能力、移動・運動能力、介助度）に関しては、各下位カテゴリの4段階評定を得点化し、その総合的な得点平均によって、4つの群に設定した。第1群は軽度群（41名)、第2群は中度群（65名)、第3群は重度群（46名)、第4群は重度重複群（26名）とした。障がいの程度群を独立変数に、「育児のおける感情体験」(「肯定的感情」、「否定的感情」）のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、有意差はみられなかった。

5）「障がいの程度」の下位カテゴリとの関連

育児のおける体験は障がいの違いや程度によってその違いがあると思われるにもかかわらず、「障がいの程度」において有意差がみられなかったことから、「障害の程度」の下位カテゴリと「育児における感情体験」との関連を検討した。

① 「表出言語能力」の程度との関連：4段階評定に従い、第1群は高程度群、第2群は中程度群、第3群は低程度群、第4群は不可群として設定、独立変数とし、「育児における感情体験」の下位カテゴリ(「肯定的感情」、「否定的感情」）それぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「肯定的感情」において群間に有意な傾向がみられた(F(3,177)＝2.504、p＜.1)。このことから、必ずしも表出言語能力が十分にあることが「肯定的感情」を引き出したり、または、表出言語能力がないことが「肯定的感情」に負の影響を与えるとはいえないことが予測された。(Figure6参照)

② 「理解力」の程度との関連：4段階評定に従い、第1群は軽度群、第2群は中度群、第3群は重度群、第4群は重度重複群として設定、独立変数とし、

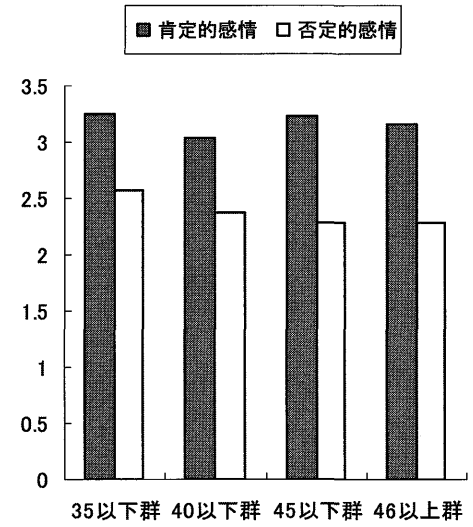

Figure4　母親の年齢と育児における感情体験

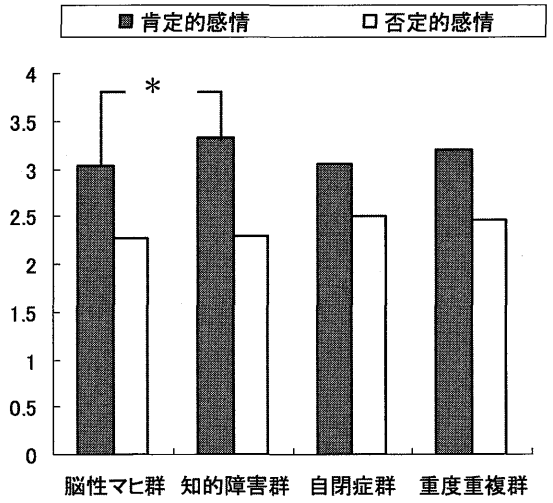

Figure5　障害の種類と育児における感情体験

「育児における感情体験」の下位カテゴリ（「肯定的感情」、「否定的感情」）それぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「否定的感情」において群間に有意差がみられた（F (3,177)＝3.045、p＜.05)。多重比較による下位検定を行った結果、第1群が第4群より有意に低かった（p＜.05)。(Figure7参照)

③ 「生活介助」との関連：4段階評定に従い、第1群は軽度群、第2群は中度群、第3群は重度群、第4群は重度重複群として設定、独立変数とし、「育児における感情体験」(「肯定的感情」、「否定的感情」)のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、有意差はみられなかった。

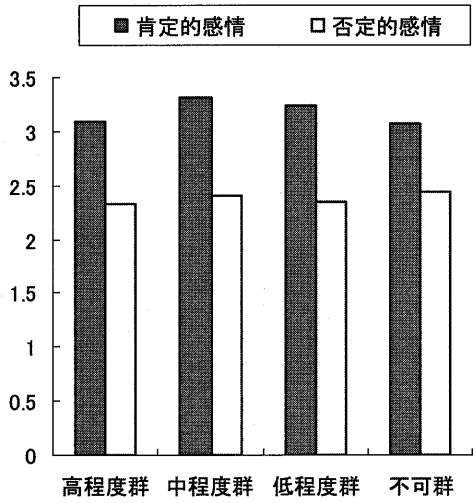

Figure6 子どもの表出言語能力と「育児における感情体験」

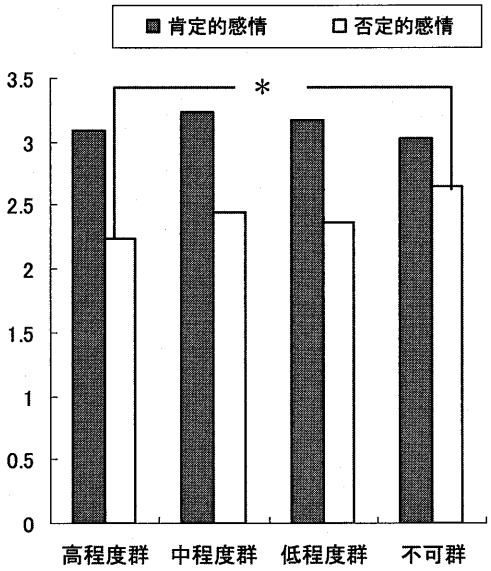

Figure7 子どもの理解力と育児における感情体験

7．子どもへの関わり方

1）子どもの年齢との関連

子ども年齢群を独立変数に、「子どもへの関わり方」(「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「強迫的関わり」において群間の有意差がみられた(F (3,177)＝2.963、p＜.05)。多重比較による下位検定を行った結果、第1群が第4群より有意に高かった(p＜.05)。(Figure8参照)

2）母親の年齢との関連

母親年齢群を独立変数に、「子どもへの関わり方」(「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、有意差はみられなかった。

3）「障害」の種類との関連

「障害」の種類の4群（脳性マヒ群、知的障害群、自閉症群、重複障害群）を独立変数に、「子どもへの関わり方」(「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）それぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「ほどよい関わり」において群間に有意な傾向がみられ（F (3,177)＝2.164、p＜.1)、さらに「強迫的関わり」において有意差がみられた（F (3,177)＝2.141、p＜.1)。多重比較による下位検定を行った結

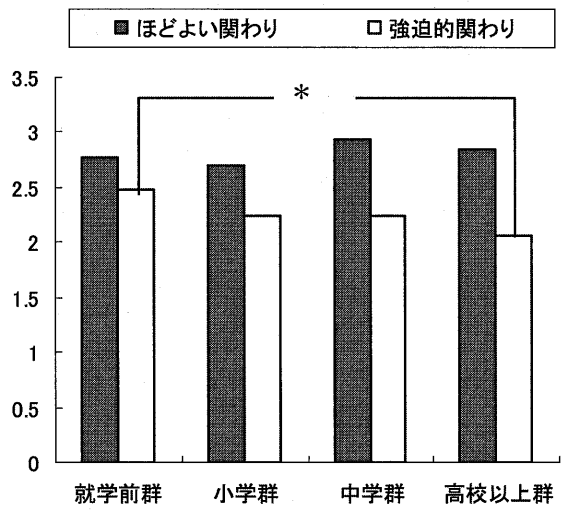

Figure8 子どもの年齢による「子どもとの関わり方」

果、「強迫的関わり」において重度重複群が脳性マヒ群より有意に高かった（p＜.05）。(Figure9参照)

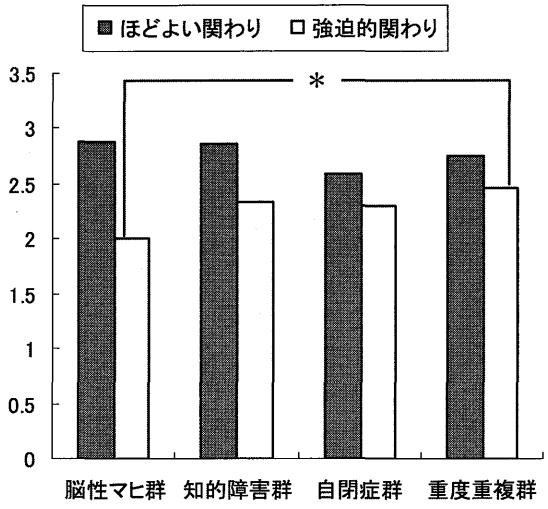

Figure9　障害の種類と「子どもとの関わり」

4）障がいの程度との関連

障がいの程度群を独立変数に、「子どもへの関わり方」（「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）のそれぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「強迫的関わり」において有意差はみられた（F(3,177)＝5.695、p＜.001）。多重比較による下位検定を行った結果、第1群が第2群より有意に低く（p＜.05）、第4群より有意に低かった（p＜.05）。(Figure10参照)

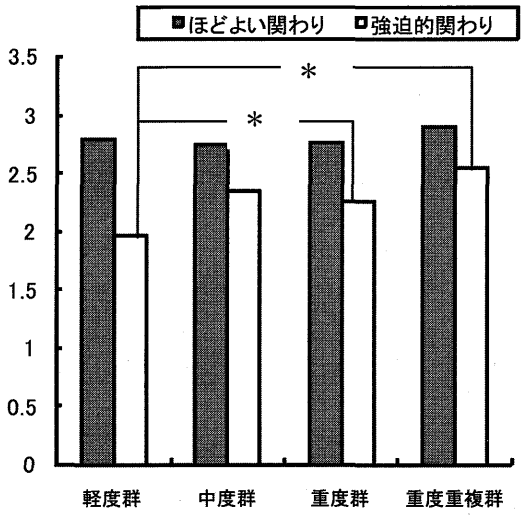

Figure10　障害の程度と子どもへの関わり

5）「障害の程度」の下位カテゴリとの関連

「障害の程度」において有意差がみられたが、「育児における感情体験」において、「障害の程度」の下位カテゴリと関連がみられたことから、「子どもへの関わり方」に関しても、「障害の程度」の下位カテゴリとの関連を検討した。

① 「表出言語能力」の程度との関連：「表出言語能力」の4段階評定に従い、第1群は軽度群、第2群は中度群、第3群は重度群、第4群は重度重複群として設定、独立変数とし、「子どもへの関わり方」の下位カテゴリ（「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）それぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「ほどよい関わり」において群間に有意差がみられ（F(3,177)＝2.748、p＜.05）、多重比較による下位検定を行った結果、第4群が第3群より有意に高かった（p＜.05）。さらに、「強迫的関わり」においても群間に有意差がみられ（F(3,177)＝4.615、p＜.05）、多重比較による下位検定を行った結果、「強迫的かかわり」において軽度群が中度群および重度重複群に比べ、有意に低かった（p＜.05；p＜.05）。(Figure11参照)

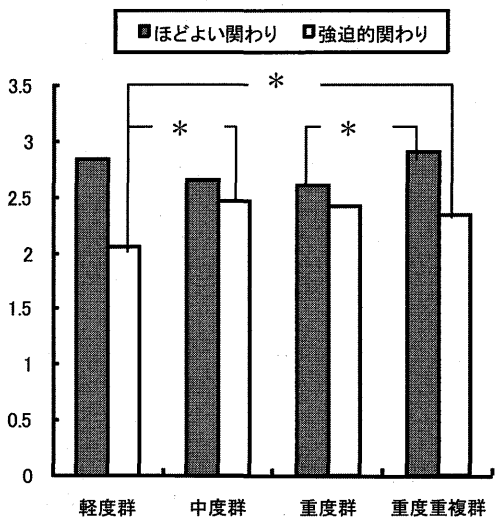

Figure11　子どもの表出言語能力と子どもへの関わり

② 「理解力」の程度との関連：「理解力」の4段階評定に従い、第1群は軽度群、第2群は中度群、第3群は重度群、第4群は重度重複群として設定、独立変数とし、「子どもへの関わり方」の下位カテゴリ（「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）それぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「強迫的関わり」において群間に有意差がみられた（F(3,177)＝4.447、p＜.001）。多重比較によ

る下位検定を行った結果、第1群が第3群より有意に低く（p＜.05)、第4群より有意に低かった（p＜.05)。(Figure12参照)

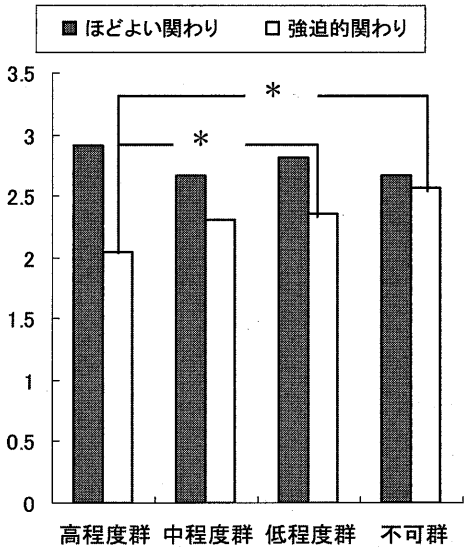

Figure12　子どもの理解力と子どもへの関わり方

③　「生活介助」との関連：4段階評定に従い、第1群は軽度群、第2群は中度群、第3群は重度群、第4群は重度重複群として設定、独立変数とし、「子どもへの関わり方」の下位カテゴリ（「ほどよい関わり」、「強迫的関わり」）それぞれの得点平均を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「強迫的関わり」において群間に有意差はみられた（F(3,177)＝3.654、p＜.05)。多重比較による下位検定を行った結果、第1群が第3群より有意に低かった（p＜.05)。(Figure13参照)

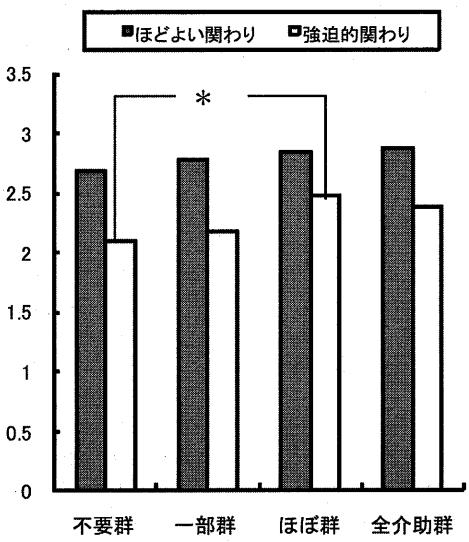

Figure13　生活介助の程度と子どもへの関わり方

考　察

1．障がい児をもつ母親の「育児における感情体験」の様相

育児における感情体験については、全般的に「肯定的感情」が「否定的感情」より高く、悩みや問題を抱えながらも、同時に、それらを抱えうる喜びや楽しみなどが存在することがうかがえた。子どもが障がいを持つことは子どもの幸せを願う親にとって、大きな苦しみになる一方、どの親にも通じる普遍的な子育ての肯定的な側面があるといえよう。子どもの年齢との関連については、「肯定的感情」は子どもの年齢による違いが見られない反面、「否定的な感情」においては幼児期の子どもの親と思春期の子どもの親の間に差が見られ、子どもが幼い頃には、親自身も一喜一憂しやすいことが推測された。この時期には、年齢的に成長や変化が顕著であることが予想され、その分、成長への期待や障がいの改善へのプレッシャーが大きいと同時に、思うとおりにいかないことへの落胆や焦り、不安が感じやすいのが「否定的感情」に影響しているのではないかと思われる。このような傾向は、母親の年齢との関連でも現れ、母親の年齢が低いほど「肯定的感情」も「否定的感情」も高い可能性が見られたのは、子どもの年齢の低さに影響されていると思われる。

障害の種類や程度との関連について、「肯定的感情」に関しては知的障害群が脳性マヒ群に比べて高かった点以外では有意な差がみられなかったことから、障害の種類や程度に大きく左右されることなく、育児における喜びや生きがいを感じているのではないかと思われる。ただ、肢体不自由はないが知的障害のため精神的には親との一体感が持続すると思われる知的障害群は、親にとって幼い頃の子育ての延長として関わる側面があるかもしれない。したがって、身体的には親に依存せざるを得ないが、精神的に自立して親離れしていく脳性マヒ群に比べ、「肯定的感情」を強く感じやすいのではないかと推測する。一方、「否定的感情」に関しては、「表出言語能力」や「理解力」が低い場合、そうでない群より「否定的感情」を感じやすい結果が得られた。これは、子どもの心情や気持ちを親が推測せざるを得ない状況から、親は自分自身の気持ち

が投影された捉え方をしやすく、したがって、子どもを案ずる気持ちから、「否定的感情」を体験しやすいのではないかと思われる。「生活介助」においては、その程度による差が見られなかったことから、子どものためには心身の労力を苦と思わない親の普遍的な姿が見られ、したがって、「育児における感情体験」は物理的な負担よりは、子どもを思うが故に感じる親の気持ちとして理解することが可能ではないだろうか。

2．障がい児をもつ母親の「子どもとの関わり方」の様相

「子どもとの関わり方」については、子どもの年齢が低い母親が子どもの年齢が高い母親より「強迫的関わり方」が強く、介助を必要とする重度重複群の方が軽度群より「強迫的関わり方」が強かったことから、子どもと接し、世話をする密度が高いことが「強迫的関わり方」に現れているといえよう。そのよい例としては、重度重複群の母親が「ほどよい関わり方」「強迫的関わり方」両面とも他群に比べて高かったことが挙げられる。これは障がい児をもつ母親の「子どもとの関わり方」の特性を現しているというよりは、子どもとの一体感が強く、密に接して生活する状況にいる場合、当然見られる傾向として捉えることが妥当であろう。したがって、本稿で採用している「子どもとの関わり方」自体が、「育児における感情体験」とどれくらい密接に関連しあうかについては、今後さらに検討の余地があるといえよう。

そのような前提のもと、結果から推測しうるものとして、全体的に「ほどよい関わり方」が「強迫的関わり方」より優位であり、さまざまな要因に対して大きく影響されず、有意差が見られなかったこと、「強迫的関わり方」については子どもの年齢の低さや障がいの程度の重さが影響を与えていたことなどを総合的に考えると、障がいを持つ子どもの世話という点では母子密着した関わり方をせざるを得ない反面、育児を続ける中での気づきや工夫を積み重ね、一般的な子育てに見えるような適度な距離や関わり方を持つようになるのではないかと思われる。

まとめ

障がい児をもつ親は、子どもの障がいに気づいてから、親として、人間として多くのものを体験する。親になるということは誰にとっても大きな体験であるに違いないが、通常喜びから子どもとの関係を始めるのに比べ、障がい児をもつ親の場合、まず、悲しみと絶望から始めなければならないことは否定できない。実際に障がい児をもった作家パール・バック（1973）さえ、“避けることのできない悲しみにどのように耐えるかを学ぶことは容易ではなかった・・・人生のあらゆる輝きが消え、親であるすべての誇りが消える”と語っている。

しかし、最初の出会いで感じられた悲哀と絶望が、その後の親のあり方すべてを支配し、子どもへの思いすべてを表すものであるとはけっしていえない。中田（1995）は、“親の内面には障害を肯定する気持ちと障害を否定する気持ちの両方の感情が常に存在する。それはいわば・・・表と裏の関係にある。”としている。どんな人生であっても、そこには喜怒哀楽が共存し、苦しいから得られるかけがえのない喜びや生きがいがあることは普遍的に共感できるものである。奇（1999）は、障がい児をもつ親は育児過程の中で親自身の成長を実感するとともに、その都度希望と絶望、期待と不安、自信感と悲観を同時に持ちながら、それゆえに、親も子もありのままでいいといった、子どもの障がい受容とともに自己受容に至ることを示した。苦しみや困難だけでなく、その中でこそ得られる喜びや生きがいを理解する視点は、障がいを持つ子どもとともに生きる親の心を支え、力となる援助の基本ではないかと思われる。

参考文献

Drotar, D., Baskiewicz, A., Irvin, N., Kennel, J.H., Klaus, M.H.(1975) The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A hypothetical model. *Pedriatrics*, 56(5), **710-719.**

Emde, R.N. & Brown, C. (1978) Adaptation to the birth of Down' syndrome infant grieving and maternal attatchment. *American Academy of Child Psychiatry*, 17(2), 299-323.

奇　恵英（1999）　障害児をもつ親から学ぶ　教育と医学

6、19-25.
中田洋二郎（1995）　親の障害の認識と受容に関する考察－受容の段階説と慢性的悲哀－　早稲田心理学年報　27、83-92.
新見明夫・植村勝彦（1981）　就学前の心身障害幼児をもつ母親のストレス－健常幼児の母親との比較－　発達障害研究、3(3)、206-216.
新見明夫・植村勝彦（1985）　学齢期心身障害児をもつ父母のストレス－ストレスの背景要因－　特殊教育学研究、23(3)、23-34.
パール・バック（1973）　母よ、嘆くなかれ　松岡久子訳　法政大学出版局
田中千穂子・丹羽淑子（1990）　ダウン症児に対する母親の受容過程　心理臨床学研究、7(3)、68-80.
鑪幹八郎（1963）　精神薄弱児の親の子供受容に関する分析研究　京都大学教育学部紀要、9、145-172、186-187.